

会議の概要

令和元年度 第1回

おおたま学園コミュニティ・スクール委員会

- 大山幼稚園学校運営協議会 ○ 玉井幼稚園学校運営協議会
- 大山小学校学校運営協議会 ○ 玉井小学校学校運営協議会
- 大玉中学校学校運営協議会

日 時：令和元年5月13日（月）18:30～20:30

場 所：改善センター2階 農事研修室・相談室

進行…事務局（指導主事 斎藤）

1 開会の言葉

進行

2 委員の任命・委嘱状の交付

大玉村教育委員会教育長 佐藤 吉郎

- ・新たに任命された委員の代表受領 地域住民 伊藤和弥 氏
- ・学校関係者委嘱状代表受領 大山小学校推薦 館下愛理 氏

3 教育長あいさつ

大玉村教育委員会教育長 佐藤 吉郎

- 新しい時代の幕開けと共に、平成23年4月1日からスタートしたコミュニティ・スクール（以下CSと略記）も第3期を迎える。（1期：平23～平26、2期：平27～平30）
今回新たに10名の委員さんを迎えた（総勢23名）。
本村のCSがさらに充実することを期待している。
- CSについての説明（資料をもとに）
 - ・簡単に述べると、文科省の資料『CS（学校運営協議会制度）について』には「地域と共にある学校」を目指すところがあるが、大玉では「地域と共に歩む学校」としている。これは、地域やCSに関わってもらって、学校も進化するという意味合いで「歩む」としている。
 - ・「連携と協働」という言葉はよく聞く言葉である。協働とは、同じ目標・目的に向かって、対等の立場で協力して共に働くことを意味する。（ex. 家庭や地域と学校）
 - ・「社会総掛け」という言葉があるが、地域と学校が連携・協働し合ってCSを推進していくことが大切である。
 - ・「共有」とは話し合いを通して目標やビジョンの理解を深めていくこと。
 - ・地域学校協働活動について…これまで、学校にいろいろな人（学校支援ボランティア等）に入ってもらってきているが、今は学校も地域に出て行って活動している。
 - ・これらが本村のCSが目指す「地域と共に歩む学校づくり」である。
- 教育雑誌に掲載された貝ノ瀬 滋氏（平成30年度教育フォーラムの講師）の執筆記事（p. 6参照）に、大玉村の教育の特徴が紹介されている。
 - ・たて軸（小さなスケール・メリットを生かした幼小中一貫的教育〈幼小中とうまく繋いでいくことによって子どもの育ちがよくなる〉）とよこ軸（CS、地域学校協働活動事業等）
 - ・学びの還元と循環（生涯をかけて学ぶことが好循環を生む）
 - ・地方創生の道しるべとしての教育のあり方
- 「学校で地域と出会う」（p. 7参照）…地域で大人と子どもが共に学び合うなど、人と人が繋がることを大切にしたい。「学校は地域の教室」「授業は地域の文化」＝新しい教育の考



え方

- 「小・中学校という場所」（p. 8 参照）…場所というのは単に物理的なものではない。子どもと大人の物語があって、それを共有する意味でも小・中学校は大きな意味をもっている。
- 3期目を迎えたCSの意義は益々大きなものになってきている。これからもよろしくお願いします。

4 自己紹介

- ・CS委員及び事務局職員の自己紹介

5 役員改選（座長 教育長）＊以下敬称略

- ・会 長（ 伊藤 和弥 ）
- ・副会長（ 大山 明美 ）（ 矢吹 吉信 ）（ 吉田 都 ）

※CS委員会新役員あいさつ

- ・新たにCS委員になられた方は、いったいどんな活動をしているのか分からない所があると思うが、要は「子どもたちと学校が開かれて、地域の住民と一緒に育っていく」ための活動をするということ。委員会も緊張するような会ではないので、今後もそのようにもっていきたいと考えている。どうぞよろしくお願いします。
- ・3期目になるが、今年はジャンプする年として、皆さんの力をお借りして大玉村を盛り上げていきたい。
- ・何らかの形で子どもの教育に関われることに感謝しつつ、子どもが楽しく学校に行けるということを目指して努力していきたい。

<教育長退席>

6 本日の日程、内容、進め方及び諸連絡について（事務局）

- ・CS委員報償について（手続きのお願い）

7 協議 （座長 CS副会長：矢吹）

- （1）令和元年度おおたま学園コミュニティ・スクール委員会の方針・年間活動計画について
（指導主事 斎藤）

① 理念についての再確認

- ・資料に基づき説明
- ・学校運営協議会は各校のオープンスクールの後に開催する。
- ・学校の抱える問題が山積しており、地域と一緒にになって解決していかなければならなくなっていることもCSを導入する要因である。

② 令和元年度の重点について

- ・令和元年度は「地域学校協働本部事業（地域学校協働活動）」との関連を明らかにしながら、以下の項目を重点とする。

- オープンスクール（おおたま学園主催の授業研究会）に、CS委員の皆様も参加し、各校園の学校運営協議会をその当日夕方に行う。このことにより、子ども理解・学校理解のより一層の深まりとともに、それらに基づいた協議の活性化を目指す。
- 学校関係者評価（1～2月）を実施し、学校経営・運営の改善のサイクルがより有効に機能するようにする。
- 第11回目となる教育フォーラムは、保護者、村民の方々が年に1回集い、教育・子育てについて語り合う場として実施する。その際、保護者、村民ができるだけ多く参加できるよう、呼びかけ・周知を図る。
なお、役員会が概要を企画し、内容・方法については、CS委員会において協議する。限られた時間で協議が深まるよう組織・運営方法を工夫する。
- 学校が主体となって企画するおおたま・オータム・フェスタ（第3回）の運営に参画し、ねらいの達成に寄与する。

※熟議についての説明

- ・熟議とは、多くの当事者による「熟慮」と「議論」を重ねながら課題解決を目指す対話のこと。難しいことについて話し合っていくことではない。身近な子どもの課題について話し合う機会である。

③ 令和元年度おおたま学園コミュニティ・スクール委員会活動計画（案）について説明

- 6、9、11月実施の各校園主体の学校運営協議会は、オープンスクール（5校時の授業参観）と一緒にやる。そのため、午後から夕方にかけて開催する。（授業参観一事後研究会ー学校運営協議会の午後半日の予定）
学校運営協議会には、各校園の運営状況の説明が十分できる体制で臨む。
- 7月9日第3回CS委員会ではおおたま・オータム・フェスタの内容の確認を行う。
- 役員会は必要に応じて実施する。（計画は2回 ＊4月と9月だが変更の可能性もある）
- 9月28日（日）のおおたま・オータム・フェスタはCS委員の皆様にご協力いただき実施。幼稚園は10月11日（金）実施予定。
- 第5・7・8回は学校の課題について協議するので、実施日が変わる場合もある。
- 1月に教育フォーラムを実施する。日時は未定（後日決定する）

（2）令和元年度地域学校協働活動事業計画について

資料に基づき説明

（3）各園・各校から（今年度重点的に取り組むこと、お願いしたいこと、その他）

① 大山幼稚園

- 3歳児47名、4歳児39名、5歳児40名の計126名でスタート。預かり保育は3歳児31名、4歳児25名、5歳児22名 計78名で、半数以上で年々増加している。
- 園の目標について … 『めざせ！夢に向かってがんばる子』～地域と共に、自らの夢に向かって努力し、未来を拓く子どもの育成～
 - ・目指す幼児像「進んで遊ぶ子」「なかよく遊ぶ子」「元気に遊ぶ子」
- 主体的に活動できるよう環境を整えている。3歳児に排泄のしつけが身についていない子が多く、個人差があるので保護者と連絡を取りながらトレーニングをしている。まずは基本的生活習慣が身につくよう努力している。
- 保護者との信頼関係を築いて、信頼を深めていきたい。
- 今年も地域の方とふれあう「ふれあいデー」を開催する。10月のオータム・フェスタの機会も生かすようにしたい。
- 聞く力、伝える力を伸ばしたい。（読み聞かせ等）
- 幼小連携に取り組むが、連続的な活動をしたい。
- 全ての基礎は心と体の健康である。丈夫な体作りを目指したい。
- 教育委員会でも、機会があるたびに幼稚園の様子を見に来ていただけるとありがたい。

② 玉井幼稚園

- 3歳児47名、4歳児51名、5歳児50名の計148名でスタート。
- 3歳児の約半数の子は現在トイレトレーニングが続いている。年中でおむつが取れない子がいるので家庭と協力してトレーニングしている。（おむつが取れることによって精神的な成長が見られる。）
- 子どもの実態について
素直で明るい子が多いが、自己主張が強かったり、基本的生活習慣が身についていなかったり、あきらめやすかったりするところがある。
- 教育目標「自分やふるさとに誇りをもち、夢や希望に向かう子ども ・自ら考える子ども ・心豊かな子ども ・たくましい子ども」
- 重点目標について
 - ・「自ら考え、進んで行動できる子ども」…活動や遊びを創造する意欲を育てる。
 - ・「友達と仲良くできる子ども」…友だちと仲良くできることや思いやりを育てたり、豊かな

な体験活動の充実を図りながら心情面の発達を目指す。

- ・「目標に向かって挑戦できる子ども」…自ら体を動かして遊ぼうとする健康な体作りへの意欲、いろんなことに挑戦するという心情面のたくましさを伸ばしていく。
- 昨年度玉井小と様々な交流を図った。小学生が、〇〇先生（なわとび、ボール投げ等）として幼稚園に来てくれたりした。幼稚園児もそれによって刺激を受け、様々なことに挑戦できた。今年も継続できるとよい。
- 子どもたちが帰った後、教職員で保育のこと、課題、悩みなどについて話し合いながら教育を進めている。

③ 大山小学校

- 教育目標は、幼稚園と同じで「めざせ！夢に向かってがんばる子～地域と共に自らの夢に向かって努力し、未来を拓く子どもの育成～」(コミュニティ・スクールと関連)
- 目指す児童像…「進んで学習する子」「なかよく助け合う子」「健やかでたくましい子」
- 主な具体目標…「主体的に学ぶ態度を養う」「自他の良さや違いに気づき認める心を育てる」「たくましい心身を育てる」
- 今年度は、個々の自己肯定感を伸ばしたい。
4月に先生方と本校の子どもたちのことについて話し合ったところ、素直で真面目であるが、自主性をもっと伸ばしたいという意見が多かった。
また、前年の学校評価で「自分のことが好きですか？」の項目で「とてもあてはまる」「あてはまる」を合わせて、6～7割であった。全国と比較しても同じレベルであるが、日本は先進国の中で最も低く、他国は9割以上という統計結果もある。
本校では、今年度「自分が大好き」と言える子になるよう力を入れていくことにした。
- 学校で2つの「ほめる」を実践する。
 - ・タイミング良くほめる（よくやったね！等）
 - ・無条件でほめる。(大好きだよ！等)
- 地域の方々にはいつもいろいろとお世話になっており感謝している。

④ 玉井小学校

- 291名の子どもたちが元気に運動会の練習に取り組んでいる。
- 赴任して1ヶ月になるが、保護者、地域の方々に様々な面でご協力いただいております、教職員もいつも一生懸命に取り組んでいる。このような環境の中だからこそ、子どもたちも頑張れるのだと思う。
- 教育目標は「自分やふるさとに誇りをもち、夢や希望に向かう子どもの育成」
- 教育目標や運営ビジョンを地域の方々と共有しながら取り組んでいきたい。教育目標は形だけの物になりがちだが、教職員も含めて、繰り返し子どもたちに意識させていくようにしたい。
- 目指す児童像は「自ら学ぶ子ども」「心豊かな子ども」「たくましい子ども」の3つだが、それを支えるものが家庭・地域との連携である。大玉の教育の特色（CS、地域学校協働活動等）を生かして子どもたちを育てていきたい。
- 学校は繋がる場（子どもと保護者、子どもと地域、地域と地域、保護者と地域）にならなくてはならないと考える。
また、地域の方が学校に入ると、ななめの関係というか、普段見られない子どものよさを引き出してくれるので、そういう機会を大切にしていきたい。
- 「地域に誇りをもち」は教育目標でもあるので、地域への貢献、地域を知ること等を教科と関連させながら取り組んでいきたい。
- 「心豊かな子どもの育成」について
重点として道徳の充実が挙げられるが、地域の方に活躍いただいたり、地域のよさを活用したりすることが必要であり、大玉村にはそのようなものがたくさんあるので生かしていきたい。
- 幼小中連携に関しても積極的に取り組む。

⑤ 大玉中学校

- 本校の生徒の課題の一つは恥ずかしがり屋のところである。先日の交通教室でJAのご配慮でスタントマンによる事故再現を取り入れた。その際、プロの方が子どもたちを前面に出して教室を行おうとしたが、一番出て欲しい3年生が恥ずかしがって手を挙げず、1、2年生が手を挙げるという逆パターンがあった。子どもたちは中学生らしく、素直なのだが、積極性を身につけて欲しいというのが願いである。
- 教育目標は「意欲を持って学ぶ生徒」「認め合い高め合う生徒」「自ら心身を鍛える生徒」の3つから構成されている。
- 目指す学校像の1つ目は「生徒も教師も誇りをもてる学校」で、今年度から「教師も」を加えた。2つ目は、「保護者や地域から応援され、共に歩む学校」。「共に歩む」は今年度から加えた。「地域と共に歩む学校」は村の目標でもあるのでそれを踏まえた。今までたくさん応援されてきているので、今度は学校からも地域に貢献していけるようにしたい。3つ目は「学び続ける教師がいる学校」。
- 本年度重点的に取り組む事、お願い
 - ・中学生は義務教育を終え、広い社会に巣立っていくことになるので、問題発見・解決能力を育てるために、教科横断的な教育を進める中でその能力を育てていきたい。
ex. 情報活用能力（ICTを効果的に活用する授業）、SNSトラブルに巻き込まれないようにするためにどうしたらよいか。
 - ・特別の教科「道徳」…人は集団の中で生きている。思いやりや強い意志を育む。
 - ・肥満防止のため家庭と連携する。
 - ・地域に貢献する活動に取り組む。（3年生を中心に。学校と地域が相互補完的になるような関係になることが重要）
 - ・体験活動を取り入れていきたいので、地域の皆様のご協力をお願いしたい。

（4）各園・各校ごとの意見交流

校長、副園長、学校評価担当毎にCS委員が別れて、分科会形式で意見交流を行った。（各校園の「今年度重点的に取り組むこと、お願いしたいこと、その他」について）

9 連絡事項

（1）おおたま・オートム・フェスタについて

資料に基づき概要説明

- ・学校行事として実施する。子どもたちが主体的に計画を立てて実施する種目もある。
- ・前回と変更…安達太良ふれあい登山は安全面を考慮し小4年のみで実施、ミニ運動会（小6・中1）は小・中の連携（接続）を考え計画した
- ・各部の部長は各幼・小・中で担当。CS委は副部長を担う。
- ・所属希望書の提出（本日中）

詳細については、今後“おおたま学園”で案を練っていく。



（2）その他

特になし

10 閉会の言葉 おおたま学園コミュニティ・スクール委員会副会長 矢吹 吉信氏

my opinion

貝ノ瀬 滋

Shigeru Kainose

東京都教育会会長・日本連合教育会副会長



1948年生まれ。都内公立学校教諭、各教育委員会や校長、三鷹市教育長、同市教育委員長を歴任。現在、東京都教育会会長。また、教育再生実行会議委員、中教審委員や全国コミュニティ・スクール連絡協議会会長なども務めた。著書に『校長の実践経営術 25の鉄則』（学事出版）などがある。

福島県の福島市と郡山市の中ほどに、大玉村は在る。

人口8500人の小さな村であるが、平成23年の東日本大震災後、佐藤吉郎教育長の下、大玉村は、そのスケールメリットを生かした教育施策を次々と打ち出し、特筆すべき教育改革と地方創生を展開している。

その成果として、福島県全

3. 学びの還元と循環Ⅱ学校教育と社会教育の融合

これらの特色は、村内の1つの中学校、2つの小学校、そして2つの幼稚園で構成される「おおたま学園」として具現化されている。

本年1月に開催された「第10回大玉村教育フォーラム」に4年ぶりに参加し、大玉村の復旧・

働き方改革として、非常勤講師を村独自に雇用・配置したり、IT化による学校業務の支援で負担軽減を図る。

その他、ALT、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカーの全校配置など、である。

何よりも学ぶべきは、地域の「よりよく生きようとする」多様な価値観を持つ人々とのか

体の人口が減る中、大玉村を含め2自治体のみが人口増を続けていることに注目したい。

大玉村の特色を表すキーワードは、3点である。

1. 縦軸の広がりⅡ幼・小・中の一貫体制
2. 横軸の広がりⅡコミュニティ・スクールや学校支援地域本部の地域ぐるみ体制

復興が教育改革を軸に見事な成果として公開されていることに感激した。

その要は、村のみんなが支え、みんなが育て、みんなが育つ、地域ぐるみの教育と学びの共同体を創り上げたことにある。

具体的には、幼・小・中11年間の一貫教育、そして、そのカリキュラム作り。

わりを組織化し、道徳性を磨き、郷土のよさを見直す「郷土学習」の実践である。

中でも世代間交流の「祖父母参観日」、道徳や特別活動を大事にし、親しみや敬意を学び、心を耕す実践に取り組んでいることだ。

大玉村の教育は、地方創生の道しるべである。

教育改革で子どもが増える大玉村

学校で「地域」と出会う

宮原 久美子

全国市町村教育委員会連合会副会長
(山口県市教育委員会協議会会長)



数年前から、子供の居る施設が迷惑施設扱いされて、地域住民の建設反対運動が起きていることを耳にするようになった。

ある保育園建設予定地の地域住民が反対している理由は、「周辺道路が狭く、子供を送迎する車が渋滞すると危険である」、また、「高齢者の多い静かな住宅地が送迎や子供の声で騒々しくなる」などであった。そして、地域の高齢の方が口にされたのが「だって知らない子ばかりだから」という言葉だった。私は、「そんな理由になるの?」と一瞬驚いた。けれども、「知っている子供の遊ぶ声は微笑ましいが、知らない子供の遊ぶ声は騒音」と感じてしまうのは、理屈抜きの感覚なのかもしれない。

そこで、その保育園の園長は、保護者に呼びかけ、地域への配慮を促すとともに、地域の方にご挨拶に回ったり、お便りを出したり、園児が自分の作ったものや手紙や収穫したものを持って届けたりという取組をされた。

やがて園児たちは、地域住民にとって「知らない子」から「知っている子」になっていった。地域の高齢の方は、園児たちとの交流を楽しみ、園児たちの様子を気にかけて、成長を喜んでくれるようになった。

園児や保護者にとっても、保育園や家庭以外に子供のことを気にかけて、その成長を喜んでくれる人たちの存在はどんなに心強いだろう。

山口市では、平成24年4月に、全小・中学校がコミュニティ・スクールとなった。現在、各学校が様々な取組を行っている中で、ある中学校の例を紹介したい。

その中学校では、地域のいろいろな団体とつながることで、学校のニーズと地域の

ニーズの合致する点を見いだし、地域住民と対等で継続的な関係を築いている。

地域の子育て支援拠点施設を利用しているお母さんたちが、赤ちゃんを連れて週に一回中学校を訪問する。自由に学校で過ごし、昼休みには中学生がやってきて交流する。月に一回、お母さんのための趣味の講座や子育て講座を開く。時には、その中学校の先生が講座の講師を務めることもある。

また、地域の高齢の方が、学校で生徒と一緒に花を生け、校内に飾る。

中学生も赤ちゃんもお母さんも高齢の方も、同じ地域で暮らしていながら、日常生活では、相互になかなか接点を持てない。お互いの存在は、登下校や買い物や外出のときに「見かけるだけの知らない人」だ。

特に現代社会は、世代によって、生活様式、コミュニケーションや情報を得る手段、文化が異なるため、共有できるものが少なくなっている。お互いを理解したり、共感したりすることが難しくなった。つながりのない地域社会では、自分がその地域の住民だという意識もなくなってしまう。そこにお互いの隠れたニーズがあった。

ニーズとニーズをつなげたことで、異なる世代の住民が、学校という場で知り合えた。「知り合うこと」で、「風景のように、目に映って通り過ぎていた人」が、「同じ地域で生活をしている住民同士」になった。日常生活に大きな影響を与える人ではないかもしれないが、お互いがちょっと「気にかける」人として。そこから、多様な社会で人と共に生きていくことについての想像力が、さらに培われていく。これもコミュニティ・スクールの大きな意義のひとつだろう。



紅葉の寸又峡 夢の吊り橋（静岡県川根本町）
かわね ほんちよう

コラム

小・中学校という場所

東洋大学国際学部国際地域学科

沼尾 波子
ぬま お なみ こ

小・中学校は義務教育を提供する場所だと思っていたが、それだけではないようだ。小学校区・中学校区が自治の単位として一つのまとまりを形成し、多様な役割を担っていることを各地で見聞するうちに、学校は地域を支える大切な拠点であると感じるようになった。

確かに、同じ学び舎で学んだ経験を共有することの意味は大きいのかもしれない。学校は、多感な子ども時代を過ごす場所でもあり、時間の共有を通して、子ども時代の「物語」が育まれる空間である。以前に、信州のある集落を訪れた際、小学校が統合されて学区が大きくなる前の世代と後の世代とは、近隣集落との連携のしやすさが違うという話を聞いた。子ども時代の「物語」の共有は、大人になってからの関係をも規定するのだろう。

さらに、学校という場所で育まれる「物語」の共有は、子どもだけに留まらない。地区を挙げての運動会や文化祭が開催されるなど、地域文化の創造拠点としての機能を持つたり、大人が子どもを見守る「場」となることもある。このように、学校が教育施設であると同時に地域の「物語」を育み、共有する拠点であるとするれば、その再編・統廃合についても、複合的な視点からの検討が必要となる。初等中等教育を効率的・効果的に提供するという視点から、統廃合を通じた規模拡大が

しばしば指摘される。だが、学校での学びは、日々の暮らしから切り取られた形式的な技術修得と点数取りに置き換えられた瞬間に、輝きを失うこともある。日々の暮らしの中にある驚きや発見を昇華し、気付きや学びに繋げるには、暮らしと学びの結びつきが大切である。総合学習の取組みはそのためのものだが、これを成功させるには地域の協力が欠かせない。そう考えると、学校という施設空間がもつ教育機能を効果的に果たすうえでも、地域との関係を意識しておく必要があるようだ。

安心安全な暮らしを育む地域づくりに向けて、子どもも大人も共に地域で学び合いながら、地域の物語を共有する機会をどう創出するかが問われている。小・中学校の再編・統廃合の検討には、学校教育サービスの効率的・効果的な提供体制を考えることも大切だ。だが、地域で子どもと大人が共に学び合い、「物語」を共有するというもう一つの役割について、その代替・補完の可能性を含めて慎重に検討する必要がある。公民館や図書館などの機能と役割を見直すことも考えられよう。

二〇〇〇年に全国で二万三千八百一校あった公立小学校は、二〇一七年に一万九千七百四校まで減少した。各地で廃校とその再利用が進む様子を見るにつけ、地域のなかで、子どもたちの学びを豊かに育む「場」と関係が継承されていくことを祈らずにはいられない。